

モチヤロク と じゅうたろう



【モチヤロクの写真】

わたしたちが すむこの土地には、むかしからたくさん アイヌの人たちが、サケや シカをとり、しよくぶつをつかって 生活していました。

今から 百五十年い上前、本しゅうから 人が たくさんきて、この土地を 「北海道」と よぶことにしました。そして、森や林の 木を切り、町や 道ろ、はたけを つくりました。これを、「かいたく」と言います。

アイヌの 人たちは、もともと すんでいた土地を 「わ人」(本しゅうから きた人)にとりあげられ、長い間 つづけてきた、耳かざりや、サケを とることを 「やっては いけない」、「かえなさい」、「わ人と、同じように しなさい」と、めいれい されました。

明じ十五年(一八八二年)、すずき じゅうたろうという わ人の わかものが、よこはまから、帯広に やつてきました。じゅうたろうは、一人ぼっちで はたけを つくり、「かいたく」をしました。そして、さむい さむい 十勝の 冬を、生まれて はじめて すごしました。

そんな じゅうたろうの生活と、さびしい心を たすけたのは、アイヌの リーダーの モチヤロクと なかまたちでした。モチヤロクは、じゅうたろうの ことを、いつも 心ばいして サケや シカ肉などの、食べものを あげました。じゅうたろうも おれいに ごはんを ごちそうしたり、おさけを いっしょに のんだりして、なかよくしました。じゅうたろうに 高いねつが 出たときも、たすけてくれたのは、アイヌの 人たちでした。

春になり、本しゅうから じゅうたろうの なかまがきて、「かいたく」が はじまりました。

ある日 はたけを 作るため、なかまの わ人が、草に 火を つけました。火は、あつというま

に 広がって、アイヌの 人たちの そうこが、や
けてしまいました。

「わ人は、かつてに わたしたちの 土地にき
て、こんどは 家までも、やいてしまった！」

アイヌの 人たちは、おこったり、こわがったり
して、みんな どこかへ 行ってしまいました。じ
モチャロクの 一家だけが のこっていました。じ
ゆうたろうは、なかまと いっしよに たくさんの
お米と おさけを もって モチャロクの とこ
ろへ あやまりに 行きました。

しばらくして、わ人に「サケを とっては い
けない」と きめられた アイヌの 人たちは、
食べるものが たりなくなつて、こまつて しま
いました。じゆうたろうは、アイヌの 人たちが
たすけるために、野さいのたねを あげて はた
けの つくりかたを 教えました。

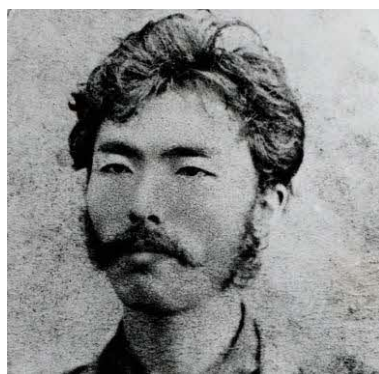
じゆうたろうは、コカトアンという アイヌの
女せいと けっこんしてからも ときどき モチ
ヤロクに あいにいって、いっしよに おさけを

のみ、「かいたく」の 大へんさについて なきな
がら、語りました。アイヌの 人たちも いっし
よに、なみだを ながしました。

「パラパラ・ニシパ（なきべそだんな）」
いつのまにか じゆうたろうは、アイヌ語の
あだ名で みんなから、よばれるように なりま
した。

「この土地に もともと すんでいた アイヌの
人たちと、たすけあつて 生きていく。」

そう 心にきめ、 じ
ゆうたろうは いつまで
も いつまでも モチャ
ロクや アイヌの 人た
ちと なかよくくらしま
した。



【すずき じゆうたろうの写真】

◎ アイヌの 人たちの そうこが もえた あと、なぜ、モ
チャロクの 一家だけが のこつて いたのでしょうか。
◆ 「ともだちつて いいな」と おもつた ことは ありま
すか。それは どんな ときですか。